
A forget me not

銀翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A f o r g e t m e n o t

【Nコード】

N 1 0 9 7 B

【作者名】

銀翠

【あらすじ】

事故で自分の彼女を失ってしまった少年が、マンションの屋上へやってくる。彼は思いつめた感じで…

僕は今、マンションの屋上にいる。手すりの上に座り、足を外側にぶらぶらとしている。

強い風が吹いたら、落ちてしまいそうだった。落ちても良いや、と思う。

マンションからの眺めは、とても良かった。上にはきれいな満月、下には街の光が輝いていた。街の光とは違い、満月は孤独に見えた。側には何もなく、ただ寂しく輝いているのからだ。

上を見ながらそんなことを考えていると、「ぴろりろ〜」といきなり携帯が鳴った。僕はびっくりして、手すりの外側に落ちた。「うわぁー!」とつさに手を出し、右手ですりをつかむ。僕はですりにぶら下がる形になった。「はぁ、はぁ…」ですりを両手でつかみ、慎重に体を持ち上げていった。そして、手すりの内側に腰を下ろす。「はぁ、はぁ…」体中から嫌な汗が噴き出て、体を冷やす。死んでも良いと思ってた、なのに…本当に死にそうになったとき、僕は死ぬことができなかった。ただただ、死ぬことが怖かった。…少ししてから、僕は落ち着きを取り戻した。

「そつえば、携帯誰からだろう」ポケットに入っている携帯を取り出すと、また鳴り出した。この着信メロディは、僕の彼女の好きな曲だった。

携帯の画面に表示されていた名前は、親友のものだった。「どうした?」とりあえず出る。

「おお、やっと出たか。なんか嫌な予感がしたからさ、最近、お前元気ないしな。…まだ彼女のこと気にしてるのか?」僕は何も答えない、いや、ただ単に言葉が出なかった。

「気にするなつてわけじゃないんだ。ただ、俺らからしたら心配だよ…彼女の後追っちゃうんじゃないかって」僕はさっきの感覚を思い出した。あまりにも近すぎる死…ひいた汗がまた噴き出る。

「おい、聞いてるか？」「ああ、聞いてる。：大丈夫だよ、後追ったりなんてしないさ」「そうか、ならいいんだ。まあ今度みんなで遊びにでも行こうぜ。きつと、彼女も元気なお前を望んでるだろうからさ」

彼女がよく言つてた言葉を思い出す。「十夜とじやが元気なら、私も元気だよ。だからがんばろう」そうやって僕を良く励ましてくれた：なんで忘れていたんだろう、彼女はいつも笑顔だったことを。

「まあお節介かもしれないけどさ、そういう事だ。かけといてあれだけど、少し忙しいから切るよ、またな」ツーツと携帯から音が漏れる。

僕は思い出した。彼女の死に顔は：安らかだったんだ…。

彼女が死んでから、僕は泣かなかった。それでも、悲しい、寂しい気持ちには、つねに心にあつた。ただ単に、僕は彼女が死んだことを認めたくなかったただけなんだって：やつと気づいた。

両目から、熱い物が頬に流れる。「うわああっ」僕は泣いた、声を張りあげて泣いた。彼女がもういないことを、死んでしまったことを、今初めて理解した様な気がした。

：どれくらい泣いていたんだろうか。涙は止まることを知らず、あふれ続けていた。でも僕は、立って歩いていかなければいけない。色々なことに、気づいたから。

立ち上がり涙をぬぐい、虚空に向かって喋る。彼女が僕に、最期に言つた言葉を返した「葉月はづき、またな」うまく笑えていたかはわからない。

僕は屋上のドアに向かって、歩き出す。「うん、またね。十夜」

僕は後ろを振り向く。彼女の声が聞こえた気がした。だから、僕はいつもの様に、彼女に背を向け、右腕をあげた。また会おう、と心の中で呟いて

（後書き）

登場人物は、みんな高2です。すっっこしだけ実体験混じってます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1097b/>

A forget me not

2010年11月24日16時24分発行